CHS 7

支援を改善し続けていますか？

成功や失敗の経験から学んだ知見を支援活動の改善に活かすことは、大切なことです。常に活動を振り返り、「やりっぱなし」にならないよう改善を図りましょう。また、支援終了も選択肢の一つです。「やりすぎ」により被災者の回復力を阻害していないか点検する必要があります。

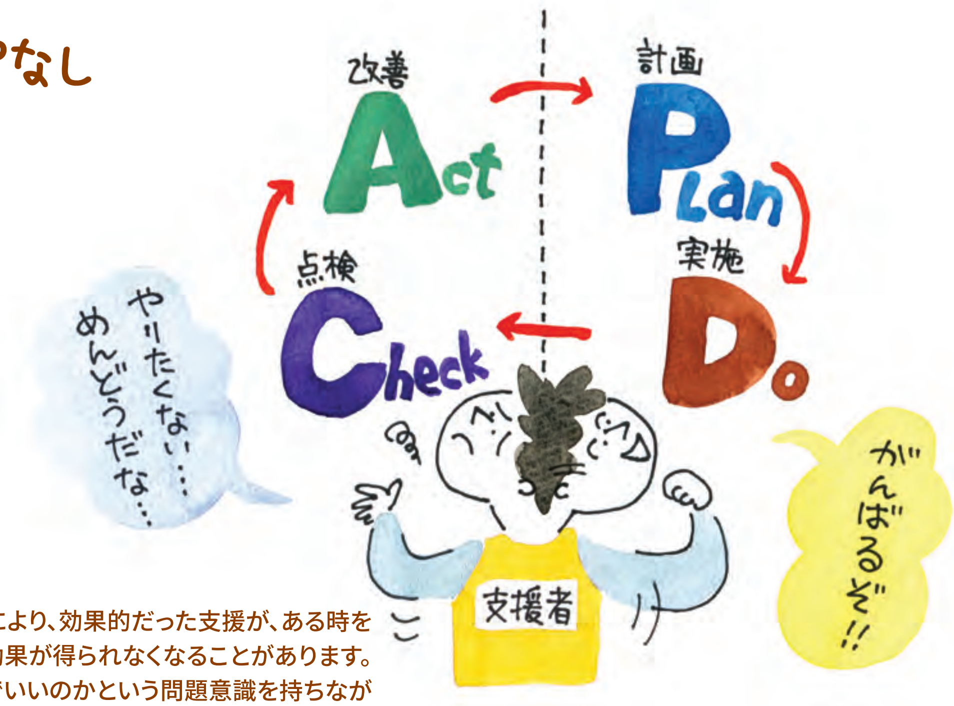
そのためには、被災者や連携している他の組織の声を聞くことも重要です。

熊本地震 7カ月
県内仮設 全4303戸完成
益城町 バリアフリー型も整備

通常の仮設住宅は段差が多く、車いす利用者が入居を断念したり、住みにくさが指摘されていました。熊本県は障がい者団体などから意見を聞き、住む人に合わせた計画に改善、入居後も要望を受付ました。（2016年11月15日付の熊本日日新聞）

支援の質を低下させる起こりがちな例

やりっぱなし



時間の経過により、効果的だった支援が、ある時を境に期待する効果が得られなくなることがあります。次も同じ支援でいいのかという問題意識を持ちながら、被災者の意見を聞き取り、改善していきましょう。

チェック

- ✔ 支援者は、進行中の支援活動を定期的に見直し、改善していますか？
- ✔ 支援者は、過去の支援経験から学び、その内容を支援活動に活かしていますか？

取り組み事例

熊本地震　生活の場である避難所を、大きな家族に　緊急期

NPO法人益城だいすきプロジェクト・きままに（きままに）

避難所内交流スペース　©きままに

ある小学校の体育館の避難所では、避難所を「生活の場＝家」と捉え、居住・談話スペースなどの配置、食事や掃除のルールなどを暮らす人々の話し合いで改善していくことで、一つの家族的な運営となりました。

例えば、子どもたちから「消灯時間後、勉強するスペースが欲しい」と意見が挙がった時は、避難所内に子どもたちが集中できる勉強スペースを設けました。

また、「おはよう」「お帰りなさい」などの挨拶が避難所内で交わされることで、見守りが自然に行われ、防犯にも役立ちました。

支援者の知恵

- 役割分担により負担がかかってしまう人が出ないよう、「できる人が、出来ることを、できるしこ※」を合言葉に、それぞれの得意なことを担ってもらったことで、自然に助け合いが継続していった。 ※熊本弁で「できる分・範囲で」という意味

熊本地震　孤立しがちな男性を見守る、楽しいアイデア　復興期

復興Project大津『カセスル熊本』（カセスル熊本）

男性も楽しめる工夫をした、仮設住宅での交流イベント　©カセスル熊本

支援団体が交流イベントを開催するのは、つながりづくりの他にも、困りごとや支援を必要としている方を確認することも目的としています。イベント参加者の多くは女性。孤独死のリスクが高く見守りが必要といわれる50～60代男性の参加があまり多くありませんでした。

運営メンバーがイベントを振り返り改善を続けた結果、男性が参加しやすいイベントとして、夕方から少しのお酒とおつまみを用意し、飲みながら話ができる「ちょい飲み居酒屋」を企画しました。「今日はここで飲んだから、もう飲まない」と飲みすぎを防止する効果もありました。

支援者の知恵

- お酒を禁止するのではなく、みんなで楽しく過ごすきっかけにした。
- 居酒屋風に飾りつけて楽しい雰囲気を演出することで、集まりやすくした。